

企画・セッション その他企画・各種会議

10月23日(月) 15:30～16:20 第5会場(仙台国際センター 会議棟 3階 白檀2)

整形外科部長会セッション

座長：仙台赤十字病院院長 北 純
名古屋第二赤十字病院 副院長 佐藤 公治

日赤病院 整形外科人事交流の経験

前橋赤十字病院 整形外科

高澤 英嗣、反町 泰紀、浅見 和義

出身大学・地域という垣根を越え、“日赤病院 = All Japan”という全国ネットワークを活かした日赤病院 整形外科人事交流が行われている。今回、日赤病院2施設にて研修を行った。その経験録を報告する。

脊椎外科医として勤務する前橋赤十字病院(前橋)は、ドクターヘリを有する救命救急の基幹病院であり、骨盤骨折や様々な四肢・脊椎外傷に遭遇する機会が多い。一方、高齢化を背景に、成人脊柱変形の症例も年々増加しており、手術の低侵襲化や高度化する手術手技への対応が迫られている。今回、低侵襲脊椎手術(MIS-TLIF/PLIF)の見学を目的とし名古屋第二赤十字病院(名二)へ、また、骨盤骨折に対する脊椎骨盤固定術や、外傷治療・救急医療体制を研修すべく、神戸赤十字病院(神戸)へ出向した。両施設ともに、他施設からの研修を幾度も経験されており、滞在先などの事務的な流れは円滑で、研修に専念できた。名二では、術中神経モニタリング・透視・ナビゲーションなどの複数のモダリティーを統合する画像システムが導入されており興味深かった。脊椎手術における他職種間のチームワークは目を見張るものがあり、チームビルディングの重要性を再認識した。また、佐藤公治先生によるハンズオンなど多彩なプログラムが用意されていた。神戸では、研修期間内に脊椎骨盤固定を経験できなかったが、伊藤康夫先生直々に手術法の実際・ピットフォールなどについて御指導を賜り、研修後も骨盤外傷の症例について親身に相談にのって頂いた。また、岡山大学系の骨折治療の現場や、兵庫災害医療センターとの医療連携など、幅広く研修させて頂いた。両施設への人事交流を通し、activeに活躍する同世代の先生方との出会いもあり、貴重な経験となった。

本人事交流は、自らの姿勢や自施設のシステムなどを再検討でき、医師個人だけでなく施設の活性化をも期待できる制度と思われる。医師・病院双方にとって魅力的なものであり、今後の継続とさらなる発展が望まれる。

横浜市立みなと赤十字病院整形外科専門研修プログラムの立ち上げについて

横浜市立みなと赤十字病院 整形外科¹⁾、
臨床教育研修センター²⁾、
相模原赤十字病院 整形外科³⁾

若林 良明^{1) 2)}、浅野 浩司¹⁾、沼野 藤希¹⁾、
芦川 良介³⁾、宮川 祐介³⁾、吉田真沙子²⁾、
松尾 萌花²⁾、小森 博達¹⁾

【はじめに】2017年度から全科一斉に開始予定であった新専門研修プログラム制度は延期となったが、日本整形外科学会では数年前からプログラム制への移行の準備が進められていたため、最終的に2017年度は新制度(暫定プログラム)と従来の研修制度を並列して施行することとなった。当科では暫定プログラムのII型(I型は大学病院)研修基幹施設として申請を行い、1名を採用し4月から研修を開始している。準備、申請、採用に至る過程のポイントを報告する。

【研修施設群の構成】当科のプログラムは、大学医局の関連病院の枠組みを越えた、神奈川県横浜市を中心とした地域による地域のための専門研修プログラムであることを基本コンセプトとした。筆頭演者の出身医局である東京医科歯科大学と、同大学関連のがん研有明病院以外に、同大学とはこれまで関連のなかった県内の4施設に連携を打診し、3施設と連携することとなった。地域研修は県内山間部の相模原赤十字病院にお願いすることとなった。一時的な見学・人事交流と異なり常勤医としての採用をお願いするため、整形外科部長だけでなく、それぞれの施設長や所属医局の大学教授にも、本プログラムの趣旨はもちろんのこと、プログラム制度自体の概略を説明するなどの必要があった。

【教育資源の按分】2017年度の申請では、指導医数や症例数を施設ごとに按分する必要があり、それぞれの施設の所属医局の医局長と折衝する必要があった。プログラムの立ち上げの中で最も煩雑な作業であり、2018年度以降はこの必要がなくなったことは、担当者として安堵している。

【募集・採用】募集を開始した時点では、多施設が集まる合同説明会などは終了しており、当科で専門研修プログラムの専攻医を募集していることを、研修医にPRする術がないことに苦慮した。日整会に研修医向けのHPの内容やリンク構造の変更を依頼するなどして対応したが、採用したのは臨床研修1年目を当院で受けた研修医であった。